

1,400年前の横穴墓に持ち込まれた2,000年以上前の石斧

タイトルのとおり「1,400年前の横穴墓に持ち込まれた2,000年以上前の石斧」すなわち600年以上前に使われた石斧を墓に持ち込んだ古墳時代の人々がいた、というのが今回のコラムである。

最初にこの事実に出会ったのは数年前、宮崎市佐土原町に所在する土器田1号横穴墓の発掘調査報告書をめくった時のことである。問題の横穴墓は、光陽台団地の造成に先立って1976年3月15日から10日間の日程で、当時、宮崎県文化財専門委員であった石川恒太郎氏、宮崎県教育庁文化課主事であった岩永哲夫氏らによって発掘された3基の横穴墓の1つである（今気づいたが、私はこの調査期間中に生まれている…）。調査日誌によると、石斧の出土した横穴墓はいつからか開口しており、羨道・玄室とも土砂で埋まっていたという。石斧は玄室中央付近で出土したといい、当時作成された横穴墓玄室の平面図にも「石器」として石斧のあった位置が描き込まれ、岩永氏はこの石斧について「石灰岩製仮器」と報告された。

面白い事例であり「古い石斧が古墳時代に砥石等として再利用された」と予想のうえで実見したが、砥石として使われた痕跡はなく、土器田1号横穴墓の石斧は、弥生時代前半の宮崎で使われていた扁平片刃石斧そのものであった。第三紀層の軟質砂岩を掘り込んだ横穴墓であるから、壁面に弥生時代の遺物包含層等が露出して偶然に玄室内へ石斧が落ち込んだ可能性はゼロである。出土状況等から素直に判断するならば、横穴墓の開口後に石斧が入り込んだ可能性は残るとはいえ、この横穴墓を残した人々によって実に600年以上前の石斧が墓に持ち込まれたと言うしかない。ただし、類例のない特殊な状況であり、私の中で何かスッキリしないままとなっていた。

*

そして、大分県立埋蔵文化財センターと合同開催の展示会「豊と日向～日出る国の考古学～」(2018年1月開会)の準備は、大分の考古学に親しく触れるよい機会となったのだが、大分県日田市にある7世紀初頭の北友田4-1号横穴墓で弥生時代の扁平片刃石斧が出土している事実を知ることとなった。おまけに北友田の例は、横穴墓が未開口であったというから、「1,400年前の横穴墓に持ち込まれた2,000年以上前の石斧」の確実例である。報告書によると、未開口につき玄室内に乱れはなく、床に敷かれた円礫の上に石斧があったという。

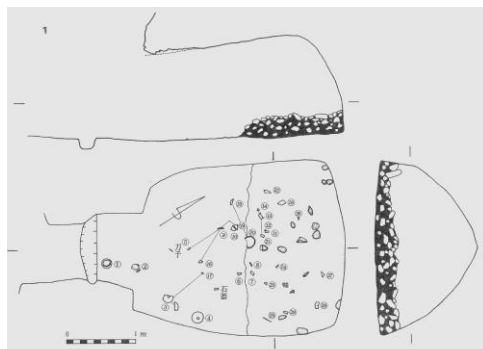
ここきて、宮崎の土器田例の引っかけは、大分の北友田例でもってひとまず解消したと言ってよさそうであり、宮崎と大分で共通してみられる点も注目される。一方で、新たな疑問点も出てくる。そもそも、この横穴墓の時代には、斧先は全て鉄製であろうから、石斧が横穴墓から出土する点は自然でない。これらの横穴墓を残した人々は、それを古い石斧と認識していたのか・・・認識の如何にかかわらず、どういう理由や意味付けで墓に持ち込んだのか・・・。斧として古墳時代に利用され鉄斧の副葬例と同じように墓にも納められた？ 600年以上も前の斧が何かの理由で永く保管等なされて、ついに墓に納められた?? そもそもこの石斧は、カマボコ板風で一端には刃がつき、風化によって石の目が縞状に浮き上がっているという、単なる石ころでない点が目に留まって墓に納められた?? 報告のとおり、斧の「仮器」?? ・・横穴墓の時代の人びとを知る興味深い1コマとして追いかけてみたいテーマである。

「1,400年前の横穴墓に持ち込まれた2,000年以上前の石斧」の正体、皆さんはどう思われますか？

(藤木 聡)



土器田1号横穴墓から出土した弥生時代の扁平片刃石斧
(所蔵：宮崎県埋蔵文化財センター)



土器田1号横穴墓の玄室平面図
(『宮崎県文化財調査報告書』第23集、1981年刊行より)